

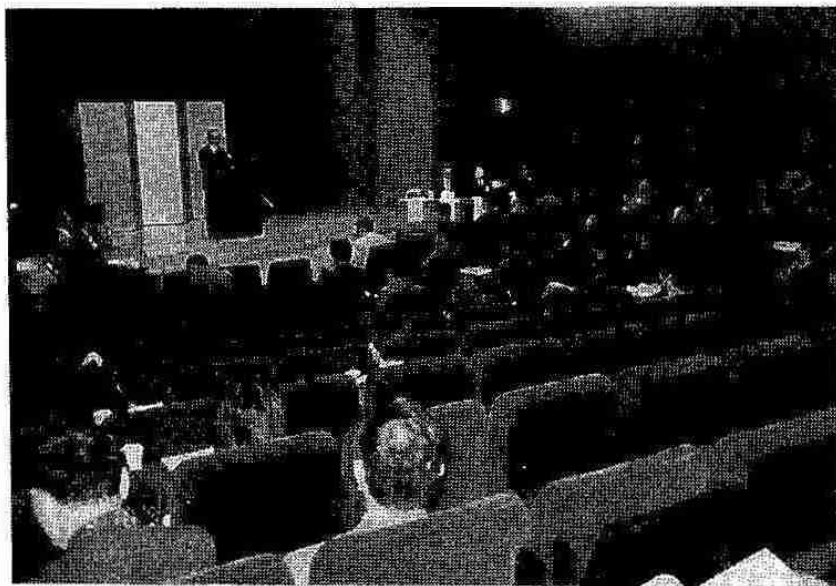
—秋季大会報告—

## 日本気象学会1997年秋季大会（札幌）報告

1997年の日本気象学会秋季大会は、10月7日から9日までの3日間、北海道大学学術交流会館および百年記念会館でおこなわれた。大会の実施状況は以下の通りである。

研究発表会	352件（うちポスター87件）
参加者	627名
シンポジウム	「北極圏の大気環境と物質循環」
座長	塩谷 雅人（北海道大学大学院地球環境科学研究科）
講師	遊馬 芳雄（北海道大学大学院理学研究科）
	太田 幸雄（北海道大学大学院工学研究科）
	山崎 孝治（北海道大学大学院地球環境科学研究科）
	神沢 博（国立環境研究所）
懇親会	札幌ビール園（10月8日）
参加者	256名

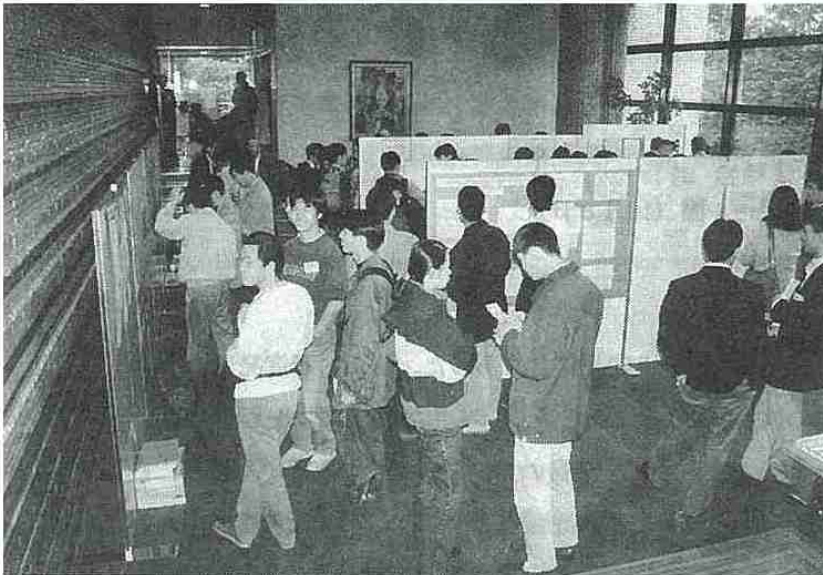
参加者は前回（1992年）を250名ほど上回り盛会であった。また、研究発表の方でも、予想をはるかに上回るポスターセッションでの発表がおこなわれ、たいへん内容の充実したものであったといえる。以下では、学会の運営に協力していただいた方々や、学会員の方から寄せていただいた感想、さらには奨励金を受賞された旭川気象台の山下さんから寄せられた原稿を掲載して、学会の雰囲気をお伝えします。



◀ 総会



◀研究発表会



◀ポスターセッション



◀懇親会

## 1997年秋季大会会場係を担当して

北海道大学大学院理学研究科 遊馬 芳雄

何はともあれ5年に一度の日本気象学会北海道支部の最大行事が無事に終わったことにほっとしています。大会参加人数627名、講演発表数352件と我々の当初見込みをはるかに越えて成功裏に終了できたことに大会をお世話させていただいた者の一人として、大変嬉しく、また、誇りに思っています。これもひとえに、色々な面で大会を支えてくださった大会実行委員、支部並びに本部役員の方々、それに大会に参加していただいた気象学会の会員の一人一人の協力による賜で、皆様の協力を深く感謝している次第です。

5年前の札幌大会では申し込みに手間取り大学の施設を使えなかったことを教訓に1年半も前から大会委員長である菊地先生によって確保されたのが大会に向けての第一歩であった。会場は5年前の札幌大会から4会場となり、学術交流会館だけでは会場を確保しきれないため百年記念会館も早々とおさえた。5年前の大会マニュアルを参考に準備を進めたが、発表形式がここ5年間に大きく変化していたことに改めて驚かされた。5年前はまだスライド発表が主であり、各会場毎にスライドプロジェクター係の他、スライド受付係を配置していた。現在の口頭発表はOHPが主でありOHPの面倒は座長のとなりに座っている時計係が面倒を見る。また、映写係は各会場とも配置しているが他の係と兼務である。最も大きく変わったのが、ポスター発表で5年前はわずか11件に過ぎなかったが、札幌大会の半年前のつくば大会でのすべての発表がポスターで行われたことを反映してか87件の発表申し込みがあった。講演申し込みが締め切られるまで、これほど多くの発表があることを想定していなかったために大いにあわてた。前回程度の発表件数であればロビーに会館備え付けのパネルで十分に稼ぐことができるが、遥かに収容能力を超えている。気象学会の告示しているパネルの大きさは横長で1件あたりに2枚のパネルが必要である。十分な会場もないし、パネルを借りる予算もない。新たに使用していない会議室を借りることにし業者に打診したところ、札幌にはそれだけのパネルを集めることができないので、企業展示会に使う仮設の仕切壁を作り、暗くなってしまうので電灯を各パネルにつける必要もあるという。早速、この旨を講演企画委員会に伝えたところ大会交付金の増額が認められ少し安心したがまだ足りない。窓に面した2階ロビー廊下をポスター会場にあて電灯工事を最低限におさえ、さらに、気象学会の前に同じ会場が地球電磁気学会で使用されるとの情報を得、ポスターパネルを続けて借りることで商談が成立し、何とか安くおさえることができた。

国際会議をまねて「ビールを片手に熱く議論を飛ばす」との計画もあったが、これは会場の都合から実現せず、大会委員長の計らいでドリップコーヒーを片手に議論をする場は提供することができた。苦労も多かったが充実した大会であったと思う。

## シンポジウム「北極圏の大気環境と物質循環」を担当して

北海道大学大学院地球環境科学研究科 塩谷雅人

秋季大会でおこなわれるシンポジウムは、大会を担当する地域の特徴を生かしたものをその題材として選ぶことが多い。たとえば、前回の札幌大会では「都市の豪雪」ということで降雪の観測と予測に関する講演がおこなわれた。今回も北の大地らしく「北極圏の大気環境と物質循環」というタイトルのもと、特に北半球の極域を中心として、地表付近から成層圏にまで視野を広げ、それぞれの領域で特徴的に見られる大気の流れ、およびそれにとまなう微量成分等の分布とその動態について4名の方に講演していただいた。詳しい講演内容は気象学会誌「天気」に掲載される予定であるのでそちらをご覧頂くとして、ここでは、このシンポジウムの取りまとめ役、座長を仰せつかったものからの感想を少しばかり記したい。

取りまとめ役、座長として何といっても気にかかるのはシンポジウムへのお客さんの入りである。シンポジウムのおこなわれる大会2日目午後という、みなさんちょっと足を伸ばして観光へ、というパターンもよく見られるが、今回はあまり良い天気ではなかったせいもあってか、シンポジウム会場は盛況であった。また、講演者の一人、環境研の神沢氏が堀内基金奨励賞を受賞されたこともあって、さらに熱のこもったものとなった。いつものことながら、学会関連行事が長引き、シンポジウムの時間がやや短くなってしまったが、これまたいつものことながら、最後に用意した全体討論時間をさいて、講演者の方には時間いっぱい講演をして頂いた。そんなこんなで、講演者、あるいは聴衆の皆さんの中には不満を持たれた方もおられるかも知れない。まあしかし、取りまとめ役の私としては、なんとか無事役目を果たすことができたのではないかと考えている。



## 気象学会の印象

北海道大学大学院理学研究科 山田 広幸

気象学会全国大会への参加は、94年の春季大会以来通算7回目となりますが、今回初めて札幌開催の気象学会全国大会を経験させていただきました。これまで参加してきた大会では、年々増え続ける大会参加者に対応できず、会場の一部が人で溢れ返ってしまう事態を幾度か経験しており、個人的には今回の会場である学术交流会館と百年記念会館の容量が心配でしたが、札幌での開催のため参加者が顕著に多くなることになかったせいか座席に余裕があり、その心配は無用であったと思いました。学会期間中は寒気の流入により、10月上旬にもかかわらず夜には雪も舞うような寒さとなりましたが、雪の研究を軸として歩んできた北海道支部の主催としては、これは大会開催にふさわしい天気だったといえるのかも知れません。

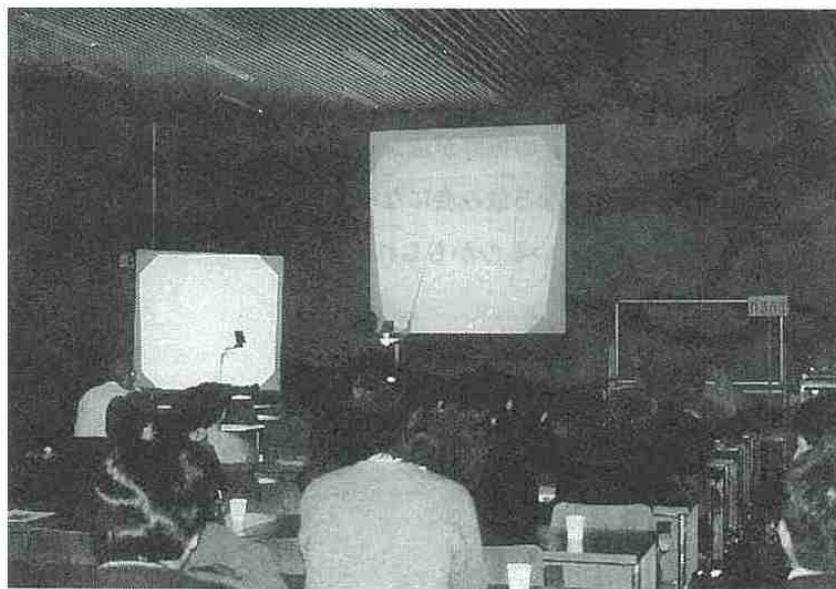
今年から春季大会ではポスターセッションを中心とする発表様式に変更され、今年は春季大会のポスターと秋季大会の口頭発表といった2つの発表様式を体験することが出来ました。ポスターセッションは、その道の研究者と深い議論の出来る貴重な場ではあるものの、少数の人にしか自分の研究をアピールすることが出来ないという欠点があります。第一種講演は5分という短い講演時間ではありますが、多くの人に研究を聞いて頂き、様々な分野の人からコメントを頂ける利点を持っており、口頭発表の重要性を改めて感じました。

少し大会そのものからは外れますが、学会初日の夕方に若手研究者が集まって気象学会若手会という集まりを開くのが慣例となっております。分野の異なる若手研究者・そして研究者を目指す学生が、お互いと議論を交わせる貴重な場であり、私も学会の楽しみの一つとしております。しかし近年の大学院生の増加で100人近く集まるようになりました。気象学会の裾野が広がるのは喜ばしいことではありますが、ここまで大きくなるとまとまりを取るのも難しく、単なる飲み会になってしまった感があり、物足りなさも感じました。若手会もその存在意義を再考する時が来ているのかもしれない。

## 学会の会場係をつとめて

北海道大学大学院地球環境科学研究科 新家康裕  
新海 仁

北の大地に訪れた短い夏の記憶も薄れてきたころ、会場係のアルバイトとして気象学会に初めて参加することになりました。与えられた仕事は時計係り、マイク係り、照明係りといった簡単なものだったので、会場の雰囲気を楽しむ余裕があったのですが、思っていたほど堅苦しく感じませんでした。若い学生のように見える人がなれない口調で発表し、質問をうけているとき、彼の目はこう言ってました。「僕は忙しい教授の代りに来ただけなのでホントはよく分かりません」。質問者の声が会場全体に聞こえるようにマイクを渡しても、それを使おうとせずに発表者に対してだけ話しかける研究者もいました。こういったアットホーム(?)な場面もあれば、やはり時節柄、オゾン層の話題のときには、会場が非常に狭いせいもあって出入り口付近が通れないほどの混雑になりました。TVカメラも入っていて、オゾン層の破壊に対する研究者や世間の関心の高さを感じました。そんなこんなで最終日、ようやく仕事にも慣れてきたところで、無事学会が終わりました。今度来るときは発表者として参加したいと心に誓って、片づけ終わった会場を後にしたのでした。



▲研究発表会

## 気象学会の「サポーター」

気象予報士・札幌 波松章勝

「参加することに意義がある」という言葉は気象学会にも当てはまる言葉か？これが本文のテーマである。

近年の、インターネットの普及は目覚しく、様々な情報を自由に入手出来る環境を提供してくれる。97年に札幌で開催された気象学会全国大会の情報は、気象予報士会北海道支部（以下、MLHと略）の会員から、電子メールによってもたらされた。

しかし、気象・大気関係の学会からは20年ほど遠ざかっていたため、何か場違いではないかという不安を抱きながら、当日会場へと向う。

心細い思いで受付へ出頭すると、早速MLH会員に遭遇。確かに、MLH会員のほとんどが学会員であることは聞いてはいたが、実に多くのMLH会員が会場の各所で働いているのに改めて驚く。取りあえず挨拶などしているうちに、私でも学会に入会できると知り、その場で入会の手続きを済ませる。お陰で、「天気」を初めとする気象学会関係の情報との接点が大きく広がった。

但し、MLH関係者が集まると「異常気象」に見舞われるのジンクスのせい、大会期間中はズット天候不順で、特に初日は豪雨に見舞われたように記憶している。

学会では、様々な会場を渡り歩いたが、どこへ行っても内容が高度化しており、「浦島太郎」になったような気分であった。特に、観測方法と数値シミュレーションの高度化には目を見張るものがあり、具体的内容はほとんど理解出来なかったというのが、悲しい現実であった。

ということで、私個人にとっての結論は「参加することに意義は薄かった」ということになる。

しかし、サッカーでは実に多くの「サポーター」の存在がサッカー人気を支えているという。学会も、数多くのサポーターに支えられることで、より幅広い研究活動が可能となり、その研究成果を一般に還元していくことが出来るのではないだろうか？ そういう観点からは「参加することに意義があった」という結論になる。

ということで、真面目に研究に取り組んでおられる学会員の方々には恐縮ですが、妙な「サポーター」が1名増えたと記憶して頂ければ光栄です。

## 日本気象学会奨励金をいただいて

旭川地方気象台 山下 龍平

この度の日本気象学会秋季大会において「網走地方における海陸風について」の研究題目で日本気象学会奨励金をいただき、ありがとうございました。

私は気象庁に入り20年弱になりますが、これまでの調査・研究の実績といえば気象官署で年に一度行われる地区研究会で、気象観測業務や予報業務の仕事の中で、興味を持った事例を中心に調査し発表を行ってきた程度です。それが、今回の研究題目で日本気象学会奨励金をいただき、感激と感謝で一杯です。

対象となった研究題目は、函館海洋気象台の観測船「高風丸」と札幌管区気象台・網走地方気象台との間で行われた海陸風と霧に関する共同観測の結果をまとめたものです。この共同観測は観測期間が1週間余りと限られていましたが、幸運にも海陸風が発生し貴重な観測資料が得られました。この観測結果からオホーツク海の海陸風循環の立体構造の一部を把握することができました。しかし、海陸風については、交替時間の問題や海陸風卓越時における最高気温予想など残された問題が数多くあります。今後は更に調査を進め、これらの問題の解明に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、これまでの調査・研究にあたり職場の先輩諸氏からの適切なお助言・ご指導と共同で研究した方々の協力が、今回の奨励金の受領につながりました。推薦していただいた関係者の皆様を含め、ここに厚く御礼申し上げます。